

# 長岡京右京二条四坊一町跡・上里遺跡

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 長岡京右京二条四坊一町跡・上里遺跡

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび道路新築工事に伴います長岡京跡・上里遺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

平成15年9月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 長岡京右京二条四坊一町・上里遺跡  
長岡京右京第775次調査(7ANUNW-3地区)
- 2 調査地点所在地 京都市西京区大原野石見町地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 梶本頼兼
- 4 調査期間 2003年5月22日～2003年8月12日
- 5 調査面積 約550m<sup>2</sup>
- 6 調査担当職員 網 伸也・南 孝雄・百瀬正恒
- 7 使用地図 図1は、国土地理院発行の1:50,000地形図「京都西南部」を参考にし、作成した。図4は、京都市発行の都市計画基本図(縮尺1:2,500)「粟生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系(改正前) 平面直角座標系 (ただし、単位(m)を省略した)
- 9 使用標高 T.P.:東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点(一級基準点)を使用した。
- 11 土 壤 色 名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺 構 番 号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺 物 番 号 挿図の順に通し番号を付した。
- 14 掲 載 写 真 村井伸也・幸明綾子・担当職員
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 遺 物 復 元 村上 勉・出水みゆき
- 17 作成担当職員 網 伸也・百瀬正恒
- 18 執筆分担 網:1～3・5-(1)・(2) 百瀬:4・5-(3)
- 19 調査協力者 現地調査および概要報告作成にあたっては以下の方々からご助言とご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。  
(五十音順 敬称ならびに所属機関名省略)  
伊藤聖浩・梅本康広・木村泰彦・國下多美樹・清水みき・中島皆夫・  
中塚 良・菱田哲郎・広瀬和雄・山中 章

# 目 次

1 . 調査経過	1
2 . 位置と環境	3
3 . 遺 構	6
( 1 ) 古墳時代の遺構	6
( 2 ) 長岡京期の遺構	9
( 3 ) 中世の遺構	12
4 . 遺 物	13
( 1 ) 古墳時代以前の遺物	13
( 2 ) 長岡京期の遺物	15
( 3 ) 中世の遺物	17
5 . ま と め	18
( 1 ) 古墳時代の建物群について	18
( 2 ) 長岡京期の条坊遺構と変遷について	20
( 3 ) 出土土器群について	22

# 図 版 目 次

図版 1	遺構	古墳時代遺構面平面図 ( 1 : 200 )
図版 2	遺構	建物 1 ~ 6 実測図 ( 1 : 100 )
図版 3	遺構	長岡京期遺構面平面図 ( 1 : 200 )
図版 4	遺構	門、溝 8・10~13、柵 4 実測図 ( 1 : 100 )
図版 5	遺構	1 古墳時代遺構面全景 ( 北西から ) 2 建物 1・2 ( 北東から )
図版 6	遺構	1 建物 1 ( 北西から ) 2 建物 4 ~ 6 ( 南西から ) 3 建物 2 柱穴須恵器出土状況 ( 北西から )
図版 7	遺構	1 掘立柱建物群全景 ( 南東から ) 2 古墳時代遺構面全景 ( 北から 手前は右京772次調査 B 1 区 )
図版 8	遺構	1 長岡京期遺構面全景 ( 北から ) 2 新段階四脚門 ( 東から ) 3 古段階棟門 ( 北から )

- 図版9 遺構 1 門および溝10～12（北東から）  
 2 門南柱穴断ち割り状況（北西から）  
 3 門検出状況および土橋状遺構（東から）
- 図版10 遺構 1 建物7（東から）  
 2 建物7東側柱穴断ち割り状況（南から）  
 3 柵4および溝13（東から）
- 図版11 遺物 1 古墳時代 溝2・建物2出土土器  
 2 長岡京期 溝10・11・13出土土器および土馬

## 挿 図 目 次

図1	長岡京と調査地点図（1：50,000）	1
図2	調査前全景	2
図3	調査状況	2
図4	調査位置図（1：5,000）	3
図5	右京772次調査B1区 古墳時代遺構面全景（西から）	4
図6	西壁断面図（1：50）	7
図7	溝10・11北壁断面図（1：50）	9
図8	門・建物7実測図（1：100）	11
図9	石製品実測図（1：2 1：4）	13
図10	古墳時代土器実測図（1：4）	14
図11	長岡京期土器実測図（1：4）	16
図12	古墳時代遺構変遷図（1：600）	19
図13	長岡京期遺構変遷図（1：600）	21

## 表 目 次

表1	遺構概要表	6
表2	棟門と四脚門遺構の規模比較表（川上 貢氏作成）	12
表3	遺物概要表	13

# 長岡京右京二条四坊一町跡・上里遺跡

## 1. 調査経過

今回の発掘調査は、京都市建設局街路部街路建設課による石見下海印寺線の敷設に先だって実施した。調査は長岡京右京775次調査にあたり、長岡京西三坊大路の解明を主目的とするとともに、古墳時代以前の遺構の広がりを明らかにするため実施したものである。

調査地は京都市西京区大原野石見町内に所在する。調査区は東西約20m、南北約30mで、調査区南端は長岡京市との境界である低位段丘の裾に沿うように設定した。平成15年5月22日に伏見向日町線B1区の調査（右京772次調査）と並行して重機掘削を開始した。造成盛土および旧耕作土を排除したところ、G.L.-0.5mの深さで長岡京期を中心とする遺構面を良好に検出することが

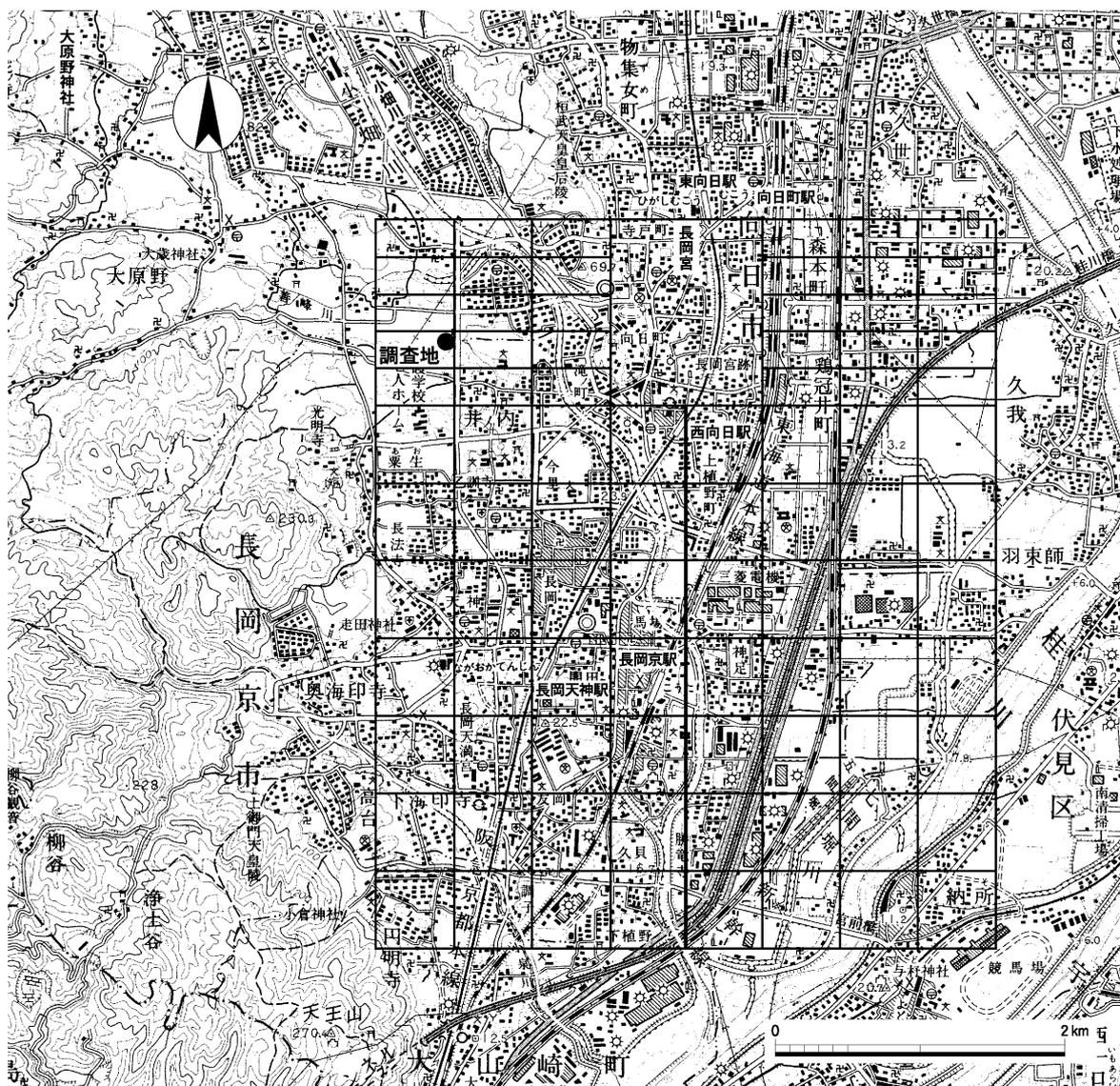


図1 長岡京と調査地点図(1:50,000)

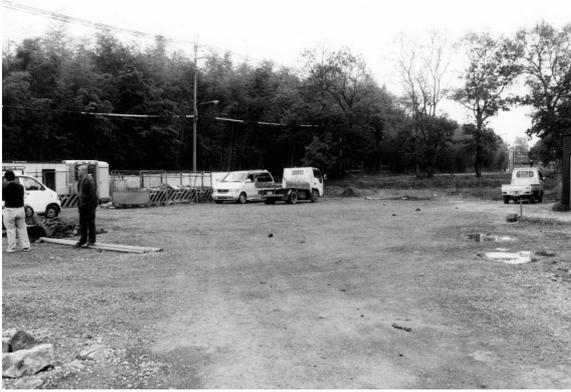


図2 調査前全景



図3 調査状況

できた。調査をすすめたところ、西三坊大路西側溝と考えられる南北溝や門跡・築地内溝など長岡京条坊に関わる遺構群を確認することができた。とくに西三坊大路西側溝と内溝は、並行して調査を行っている右京772次調査B1区でも検出していたため、両調査区で遺構面をそろえて調査を進めることとした。梅雨時とはいえ例年以上の降雨のため、調査はなかなか進展しなかったが、6月中旬に長岡京期遺構面の全景写真および実測記録を終え、6月23日より下層の調査にはいった。

下層遺構面では浅く堆積した包含層を除去したところ、規則正しく配置した数棟の掘立柱建物で構成される古墳時代後期の建物群を検出した。ところが、これらの建物群も右京772次調査B1区にまで展開しており、建物の柱穴が一部調査区界の畔の下になることが判明した。B1区では古墳時代中期後半の竪穴住居跡群も検出していたため、下層遺構面では調査区界の畔を取り除き、B1区と調査区をつなげて遺構の広がりを確認することとした。その結果、6棟の掘立柱建物と建物群を区画する溝や柵を検出し、建物配置から一般集落とは異なる在地首長層の居住空間であることが想定された。遺構の精査と並行して実測記録を行い、7月29日にはクレーン車を利用した高所からの写真撮影を実施した。そして、写真撮影後に断ち割りなどの確認調査を8月7日まで行った。調査区の埋め戻しは補足拡張調査と並行して行い、平成15年8月12日にすべての作業を終了した。

なお、長岡京期遺構面では西三坊大路と門跡を良好な状態で検出できたため、平成15年6月18日に右京772次調査B1区と同時に記者発表を行い、6月21日に現地説明会を開催している。

#### 註

- 1) 長岡京の調査回数については、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが管理する調査回数に従い、調査区地区名については以下の文献に依拠している。

『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』 京都府教育委員会 1977年

## 2. 位置と環境

調査地は、西山丘陵から東へ延びる低位段丘の北に広がる、標高約40mの氾濫原沖積層に立地している。調査地の周辺は、縄文時代から平安時代の遺跡が重なる上里遺跡に含まれている。とくに、約400m東に位置する長岡第十小学校内の発掘調査では、縄文時代後期の土壌とともに善峰川の旧河道と考えられる古墳時代後期の旧河川を発見しており、上層の奈良時代堆積層からは須恵器杯B底部に「弟国」と書かれた墨書土器が出土している<sup>1)</sup>。このような旧河川は、奈良時代以前には流路を変えながらも各時代を通じて北西から南東方向に流れていたようで、中山石見線の発掘調査（右京746次調査）においても弥生時代前期の河道や弥生時代後期から古墳時代の河道を検出している<sup>2)</sup>。調査地北側に接した右京772次調査では、縄文時代晩期の土器棺墓や古墳時代中期後半の竪穴住居跡などを多数発見しており、流路と低位段丘との間の微高地が居住空間として利用されていたことを示している<sup>3)</sup>。

古墳時代後期になると南の低位段丘上には、墳長40m前後の前方後円墳である井ノ内稲荷塚古墳や井ノ内車塚古墳などが築かれている。とくに井ノ内稲荷塚古墳は発掘調査が実施され、6世紀前半に造営されたものであることが判明した<sup>4)</sup>。後円部に横穴式石室1基、前方部に木棺直葬1基の埋葬施設をもっており、横穴式石室では6世紀後半まで追葬が行われたと想定されている。

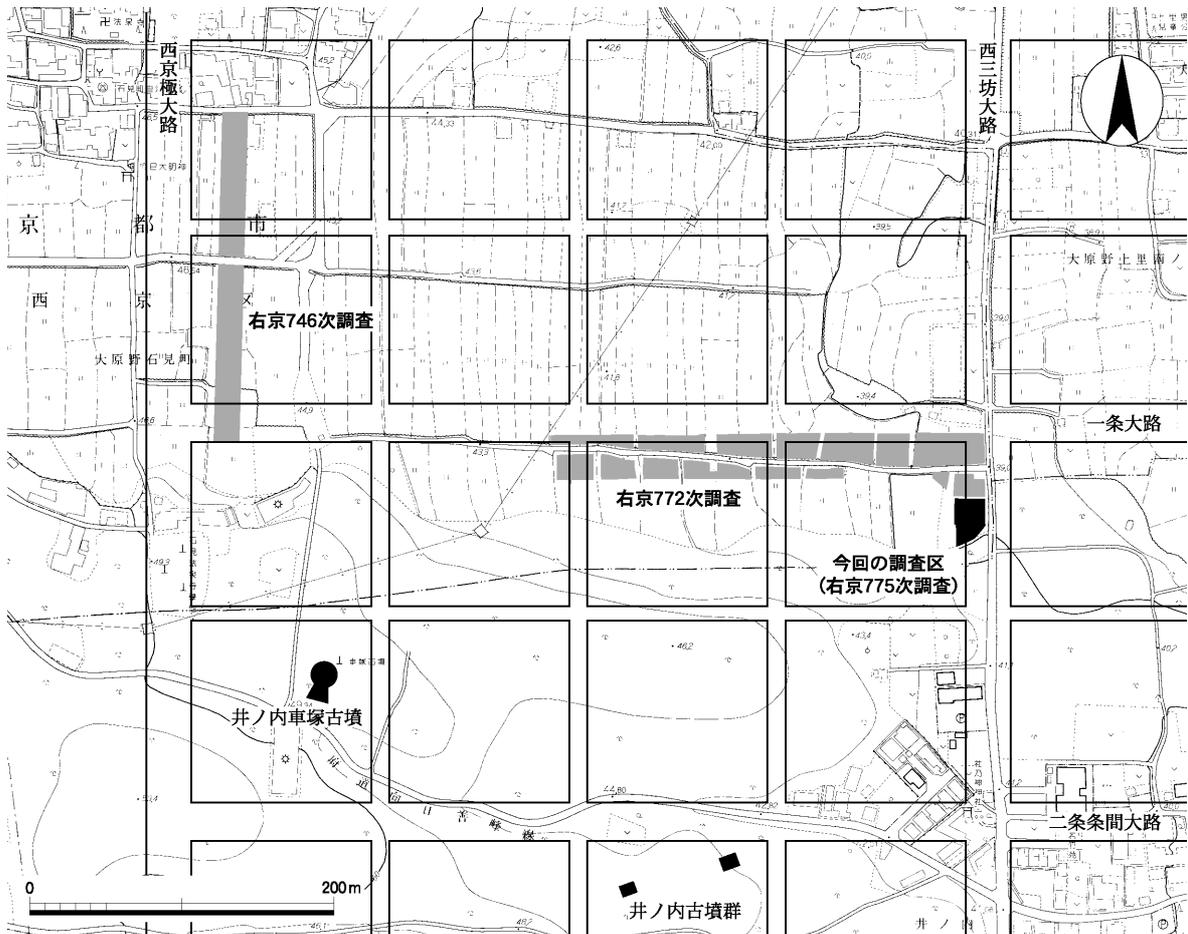


図4 調査位置図(1:5,000)

また、井ノ内稲荷塚古墳と井ノ内車塚古墳の間には、小規模な方墳4基と土壇墓3基で構成される井ノ内古墳群が形成されており、最も古い3号墳の造営は5世紀後半までさかのぼることが明らかとなっている。これらの古墳群を造営した有力集団の居住域については、井ノ内古墳群を包括する井ノ内遺跡が想定されている。井ノ内遺跡は竪穴住居群で構成される集落遺跡であるが、竪穴住居から出土した遺物は6世紀後半から7世紀初頭に属するものであり、現状では井ノ内古墳群の造営より遅れる集落と考えられる<sup>5)</sup>。

延暦3年(784)に長岡遷都が行われると、この地域も右京北西部として条坊が計画されたと考えられる。調査地は長岡京の条坊では右京二条四坊一町で、一条大路と西三坊大路の交差点のすぐ南西にあたる。長岡京北西部の調査はこれまであまり実施されておらず、条坊が実際に施行されていたかどうか長い間不明であった。実際に低位段丘上で実施されている長岡京域の発掘調査でも、条坊関係の遺構は発見されておらず、二条条間北小路以北、西三坊大路以西については長岡京条坊の施行範囲外として捉えられていた<sup>6)</sup>。ところが、昨年度から継続してきた右京746次・772次の発掘調査で、一条条間南小路と一条大路南側溝を発見し、長岡京北西部での条坊の施行が明らかとなった。とくに一条条間南小路は西京極大路推定地のすぐ東での検出であり、この地域では東西条坊路が西京極大路付近まで施行されていることが判明した<sup>7)</sup>。

ここで注目されるのが、乙訓神社の旧社地である。乙訓神社(乙訓坐火雷神社)は大宝2年(702)に『続日本紀』に初見する古社で、長岡宮遷都の時に松尾社とともに従五位下に叙され社

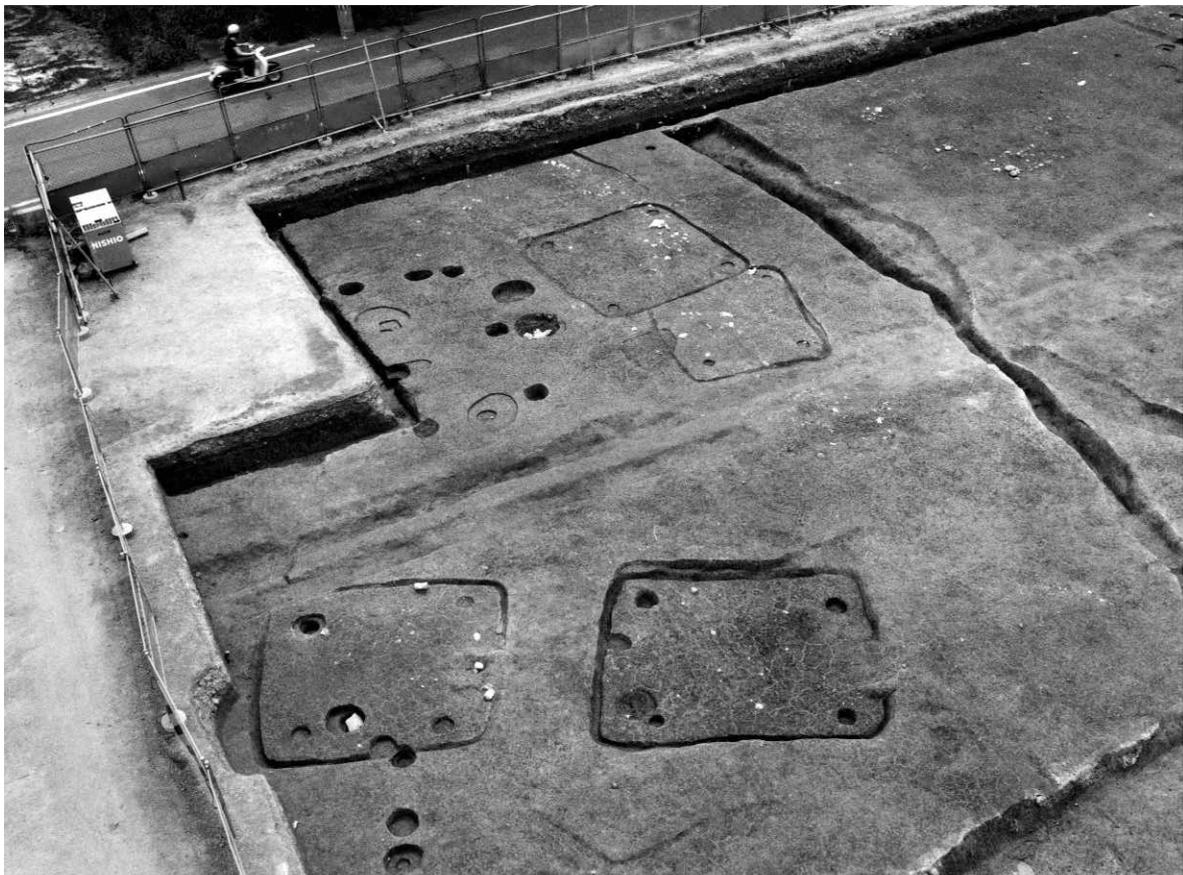


図5 右京772次調査B1区 古墳時代遺構面全景(西から)

殿を修理されている。その後、9世紀になっても祈雨の神として厚い信仰を集め、貞観元年（859）には従四位下に叙されるほどであった。現在は角宮神社として調査区の南東に所在するが、もともとは南西低位段丘上の「宮山」と呼ばれる場所にあったと伝えられている。調査地は旧社地伝承地に近く、長岡京期に重要視された神社の周辺地として、とくに開発が進められたと考えられる。

その後、長岡京が廃都になると、条坊が施行されていた地域も条里が施行され、現在まで残る条里景観が成立する。石見地域でも善峰川と低位段丘の間の氾濫原に、西で北に3°振った東西に長い条里景観が残っているが、この地域で条里が施行された時期は右京746次調査の所見から、13世紀後半以降であることが判明している。左京域では水垂遺跡で条里畦畔の調査が行われ、平安時代中期以前に条里が施行された<sup>8)</sup>と考えられている。石見地域では左京域よりも条里の施行が遅れ、中世の開発に伴って条里が成立したことが想定できる。

#### 註

- 1) 『長岡京跡右京第22・25次調査報告書 - 長岡京跡右京二条三坊二・七町、上里遺跡 - 』長岡京市埋蔵文化財調査報告書第11集 (財) 長岡京市埋蔵文化財センター 1997年
- 2) 『長岡京右京一条四坊十三・十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-2 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 3) 『長岡京右京二条四坊一・八・九町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-3 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 4) 『長岡京市における後期古墳の調査』長岡京市文化財調査報告書第44冊 長岡京市教育委員会 2002年
- 5) 『長岡京市史』資料編1 長岡京市役所 1991年
- 6) 岩松保「長岡京の完成度 - 長岡京の施行状況と遷都・廃都の事情 - 」『長岡京跡左京二条三・四坊・東土川遺跡』京都府遺跡調査報告書第28冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000年
- 7) 註2に同じ
- 8) 『水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第17冊 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 1988年

### 3. 遺 構

調査区の基本層序はG.L.-0.2～0.3mが耕作土（にぶい黄褐色砂泥層）で、その下に約0.1mほどの床土（褐色～黄褐色砂泥層）が堆積しており、この床土直下で長岡京期の遺構面となる。長岡京期遺構面の標高は南端で39.25m、北端で38.95mで、南から北に緩やかに傾斜している。古墳時代の遺構は部分的に0.05mほどの包含層が浅く堆積している程度で、長岡京期遺構面とほぼ同じ面で検出することができた。

これら遺構面の基盤層は、南端部は礫を多く含む氾濫原堆積の暗褐色砂泥層であるが、その北は安定した無遺物の褐色砂泥層となる。調査区の南側は低位段丘と沖積層の境界となる高さ約2mほどの崖面で、調査区南端でも良好に古墳時代の遺構を検出していることから、現地形は古墳時代以前の時期に形成されたと考えられる。前述した氾濫原堆積層の中に微量であるが、縄文土器あるいは弥生土器らしき土器片が包含されており、現地形の形成年代を示唆している。

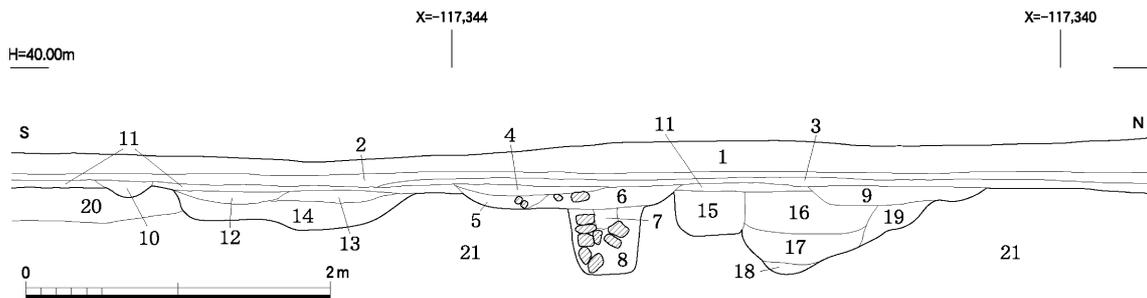
今回の調査で検出した遺構は、古墳時代後期の建物6棟・溝4条・柵3列、長岡京期の建物1棟・門1棟・溝5条からなる方形区画溝・西三坊大路路面および西側溝・築地内溝2条・宅地区画溝などである。中世の耕作溝は非常に少なく、中世にさかのぼる明確な遺構としては溝2条を検出したにすぎない。以下で各時代の遺構の概要を、古墳時代の遺構と長岡京期の遺構そして中世の遺構に分けて報告する。なお、遺構の構成を明確にするために、図版には右京772次調査B1区を再録している。

#### (1) 古墳時代の遺構（図版1・5・7）

古墳時代の遺構は全体に大きく西に振った建物群と、建物群を区画する柵・溝を検出している。なお、これらの遺構群は規則的に配置されており、西への振れもほぼ25°～35°に収まっている。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	概 要
古墳時代後期	建物1～6	掘立柱構造。建物群は大きく2時期の変遷。
	柵1～3	建物群を区画する柵。
	溝1～4	建物群を区画する溝。
長岡京期	門	当初は掘立柱構造の棟門。後に四脚門に建て替え。
	建物7	間仕切り柱をもつ東西棟。
	溝5～9	方形区画溝群。
	溝10	西三坊大路西側溝。
	溝11・12	西三坊大路西築地内溝。
	溝13	宅地区画溝。一条大路南側溝から200尺。
	西三坊大路路面 柵4	側溝氾濫部を補修。 一町を南北に2分割する柵。
中 世	溝14・15	耕作溝。



- |                          |                          |                          |
|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (耕作土) | 8 10YR3/2 黒褐色砂泥 (柵4柱穴)   | 15 10YR4/1 褐灰色砂泥 (柵3柱穴)  |
| 2 10YR4/6 褐色砂泥 (床土)      | 9 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 (溝8)  | 16 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (溝1) |
| 3 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 (床土)     | 10 2.5Y5/4 黄褐色砂泥         | 17 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (溝1)   |
| 4 10YR4/1 褐灰色砂泥 (溝13)    | 11 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥      | 18 10YR5/6 黄褐色砂泥 (溝1)    |
| 5 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (溝13)   | 12 10YR4/1 褐灰色砂泥 (溝3)    | 19 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 (溝1)    |
| 6 10YR4/1 褐灰色砂泥 (溝13)    | 13 10YR4/6 褐色砂泥 (溝2)     | 20 10YR3/3 暗褐色砂泥 (礫混堆積層) |
| 7 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (柵4柱穴)  | 14 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (溝2) | 21 10YR4/4 褐色砂泥 (無遺物層)   |

図6 西壁断面図(1:50)

ここでは仮に、この北に対して30°前後西に振れる北西-南東のラインを「南北」と表記し、それに直交するラインを「東西」として報告することにする。

建物1(図版2-左上・5-2・6-1) 調査区中央西端で検出した南北棟建物である。東西3間(約4.7m)、南北4間(約6.2m)で、床面積は29.14m<sup>2</sup>である。柱掘形は0.5~0.8mの隅丸方形で、柱痕跡は直径0.2~0.3m、残存している柱穴の深さは0.3~0.6mであった。柱掘形底部に柱を同一位置で建て替えた痕跡を確認した。建物の振れは北に対して西へ約29°である。

建物2(図版2-左中・5-2) 調査区北西部で検出した東西棟建物である。東西3間(約4.5m)、南北2間(約3.6m)で、床面積は16.2m<sup>2</sup>である。柱掘形は0.4~0.7mの隅丸方形で、柱痕跡は直径0.2~0.25m、残存している柱穴の深さは0.2~0.4mである。北西隅柱は溝4が埋没後に掘削されており、遺構の前後関係が知れる。また、この柱痕跡からほぼ完形の須恵器杯身が出土している。期TK-209型式の新相に比定されるもので、この建物が6世紀末から7世紀初頭には廃絶したことを示唆している。建物の振れは北に対して西へ27°~28°である。

建物3(図版2-右上) 建物2の北側で確認した総柱建物で、北半は右京772次調査B1区にかかり、西側は調査区外に展開する。東西2間以上(約3.6m)、南北3間(約4.8m)で、東西2間とすると床面積は17.3m<sup>2</sup>である。柱掘形は0.4~0.6mの隅丸方形で、柱痕跡は直径約0.2m、残存している柱穴の深さは0.2~0.3mである。総柱建物であることから倉庫と考えられるが、建物2あるいは溝4との前後関係は明らかでない。建物の振れは北に対して西へ約30°である。

建物4(図版2-左下・6-2) 調査区南西部で検出した建物である。東西2間(約2.5m)、南北2間(約3.2m)で同じ柱間であるが南北に長く、床面積は8m<sup>2</sup>である。柱掘形は0.5~0.6mの隅丸方形で、柱痕跡は直径0.2~0.25m、残存している柱穴の深さは0.3~0.4mである。構造の上から倉庫として機能した建物とも考えられるが、中央の束柱は確認できなかった。建物の振れは北に対して西へ約35°である。

建物5(図版2-右下・6-2) 建物4の東北東に、建物4とほぼ柱筋をそろえて建てられた建物である。東西2間(約4.3m)、南北2間(約3.3m)で建物4と同じ構造であるが東西に長い。

床面積は14.2㎡と建物4より若干大きい、やはり中央東柱がない。柱掘形は0.5～0.6mの隅丸方形で、柱痕跡は直径0.2～0.25m、残存している柱穴の深さは0.3～0.4mである。建物4東側柱と建物5西側柱の距離は約5.5mで、同一機能を持つ建物が東西に配置されたと考えられる。建物の振れは北に対して西へ約30°である。

建物6（図版2 - 右中・6 - 2） 建物5の東に接して検出した東西棟建物である。東西3間（約4m）、南北2間（約3.5m）で、床面積は14㎡である。柱掘形は0.4～0.6mの隅丸方形で、柱痕跡は直径約0.2m、残存している柱穴の深さは0.1～0.4mである。西側の中央柱掘形が建物5の東側中央柱に壊されており、建物5より古い段階に建てられたことがわかる。建物の振れは北に対して西へ約36°30′と、建物群の中で最も西に振っている。

柵1 調査区南端で検出した東西柵列である。5間分検出しているが、柱間は1.5～2.5mと不規則である。柱痕跡は約0.2mほどで、柱掘形が明確でないものが多い。残存する柱穴の深さは0.1～0.25mである。東に対して北へ25°30′振っており、建物4・5の南を区画する柵列である。

柵2 柵1の西端から北西に折れ曲がる柵列である。4間分検出しているが、柱間は1.2～1.8mと柵1と同じくばらつきが大きい。柱痕跡は約0.2mほどと考えられるが、明確には検出できていない。残存する柱穴の深さは約0.2mである。北に対して西へ44°と大きく振っているが、建物4の西を限る柵列であろう。

柵3 建物1と建物4の間で検出した東西柵列である。3間分しか検出できておらず、柱も他の柵より大きいため、建物の一部になる可能性もある。柱掘形は約0.5mの隅丸方形で、柱痕跡は直径約0.2m、残存している柱穴の深さは約0.3mである。東に対して北への振れが約29°30′で、この振れも建物1と非常に近い数値となっている。

溝1 調査区南西部で検出した幅0.7～1mの素掘りの溝である。北に対して西へ約46°振っており、北西から南東に直線的に延びる。北端は調査区外に延びるが、南端はX=-117,350ラインで途切れている。断面形は漏斗状を呈する部分もあり、そこでは2時期の堆積が認められるが、新しい段階の溝が深く断面台形を呈している。深さは約0.5mで、南端での底部標高は38.65m、北端では38.6mと全体では緩やかに南から北に傾斜する。しかし、底部は凹凸が激しく、流水の痕跡もあまり認められない。また、埋土には基盤層である褐色（黄褐色）砂泥ブロックが混入しており、意図的に埋められたことを示唆している。後述する溝2・3に切られており、建物群の南西空間を区画する機能をもった最も古い段階の溝である。

溝2 溝1の西で検出した幅0.7～1mの素掘りの溝である。北に対して西へ約48°の振れで北西調査区外から南東に延び、X=-117,349.5ラインで東北東に折れて約3mで途切れる。断面は浅いU字形で、深さ約0.3mである。底部標高は南端で39.1m、北端で38.9mとやはり緩やかに南から北に傾斜する。溝1とは異なり底部は平坦で、若干の流水痕跡も確認できる。柵1・2と方位や屈曲の状況が共通しており、南限の区画施設として共存していた可能性がある。

溝3 X=-117,340ラインからX=-117,346ラインの間で検出した、幅約0.6mの東西素掘り溝である。Y=-28,460ライン付近で約2mにわたって途切れているが、明らかに同一機能をもった

溝と判断できるため、同じ遺構として報告する。東に対して北に約19°振っており、断面は浅いU字形で、深さ約0.2m、底部標高は38.95～39.05mでほぼ平坦になっている。溝1・2、建物4柱穴を切っており、最も新しい段階で掘削された溝と判断できる。

溝4 調査区北西部で検出した、幅0.6mの素掘り溝である。東に対して北に約39°振っている。北東への展開は右京772次調査区で確認しており、Y=-28,458.5ラインで途切れている。南西は調査区外に延びている。断面は浅いU字形で、深さ約0.2mである。底部標高は南西端で38.8m、北東端で38.62mと緩やかに南西から北東に傾斜する。ただ、北東端が途切れているため、水を最終的にどのように排水したか不明である。前述したように建物2の柱穴に切られており、建物2の造営に伴い意図的に埋められた溝と判断できる。

## (2) 長岡京期の遺構 (図版3・8 - 1)

長岡京期の遺構は西三坊大路と西側溝、築地内溝、門跡、掘立柱建物など、長岡京条坊に關係する遺構を検出している。

西三坊大路路面 調査区東半は長岡京期の明確な遺構が全く検出できない。後述するように調査区中央を南北に延びる溝10が西側溝と想定できるため、この空閑地が西三坊大路路面ということになる。路面を構築する地業などは認められず、南半部で基盤層上に暗褐色砂泥が薄く堆積している程度である。また、側溝から路面側に水があふれた箇所や路面上の凹みには、礫を含む灰黄色砂泥によって入念に補修を施している状況が窺える。

溝10 (西三坊大路西側溝) (図版4) 調査区中央で南北約20mにわたって検出した南北方向の溝である。検出面での幅は1.6～1.8mで、深さは浅いところで0.15m、深いところで0.3mである。南端はX=-117,344ラインで宅地区画溝である溝13と合流し、東肩に沿う幅0.2～0.3mの細く浅い溝となって南方に消えていく。北端は右京772次調査B1区まで延びて全体で約35m検出したことになる。底部の標高は南端の合流地点で39.0m、北端のX=-117,344ラインで38.8mと南から北へ緩やかに傾斜している。埋土も底部に褐灰色から黒褐色砂質土が堆積しており、流水があったことを示唆している。また、X=-117,327ラインからX=-117,330ラインの約3mの区間では、幅約0.8mと狭まっている。この区間の西側に後述する門跡が存在するため、おそらく橋が架けられていたと考えられるが、溝肩部には護岸の施設は設けられていない。なお、この区間は後に礫

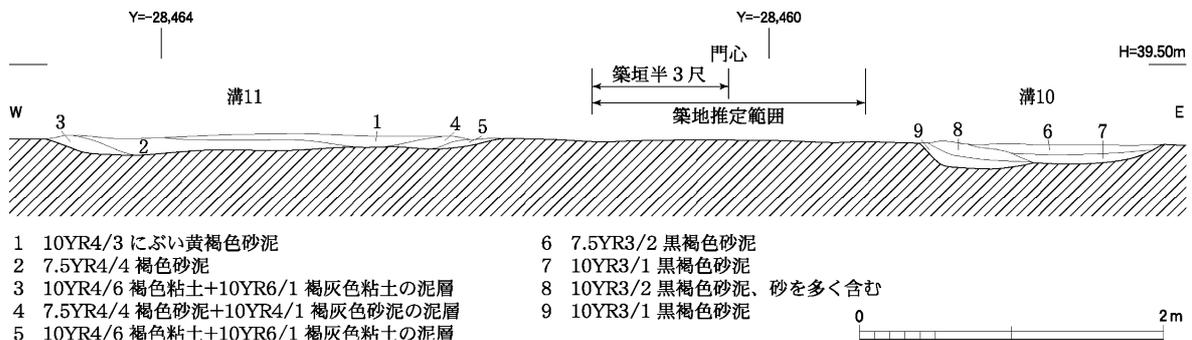


図7 溝10・11北壁断面図 (1:50)

を多く含む灰黄褐色砂泥によって意図的に埋められており、最終的に土橋状になっていた可能性がある(図版9-3)。溝心の座標値は南端で $Y=-28,458.0$ 、北端で $Y=-28,458.2$ となっている。

溝13(宅地区画溝)(図版4・10-3) 調査区南で西三坊大路西側溝(溝10)と合流する東西溝である。検出面での幅は1.5~1.6m、深さは約0.1mである。堆積状況から2時期の変遷が想定でき、最終的には南肩は同位置で幅約1mの溝になっている。溝心の座標値は $X=-117,343.2$ となっている。右京772次調査A1・2区で検出した一条大路南側溝から約60m南の地点にあたることから、一町を南北に2分割する区画溝と想定できる。ただ、南側の低位段丘上まで条坊遺構が存在するかどうかは不明であり、機能的には低位段丘からの流水を受けて宅地外に排水することが重視されていたと考えられる。実際に雨水時にはかなり多くの水が西から流れたようで、西三坊大路西側溝との合流点で路面側に水が溢れ、路面を侵食氾濫した痕跡が認められる。この合流点では土馬や小型壺などの遺物が出土している。

溝11(北内溝)(図版4) 溝10と西側に平行して南北に延びる幅約3mの溝である。今回の調査地では南北3m分しか検出できていないが、右京772次調査B1区で北に延びる状況を確認しており、合わせて南北18.4m分検出したことになる。溝11東肩と溝10西肩の距離は約2.5mで、この間に築地が設けられていたと考えられるが、築地基礎などの痕跡は確認できなかった。深さは約0.2mで、 $X=-117,327$ ラインで南端部が直線的に途切れている。この位置は後述する門跡の北柱筋に対応している。埋土は安定した褐色~にぶい黄褐色砂泥が堆積しており、流水の痕跡はなく長岡京期の土器片が比較的多く出土する。

門(図版4・9-1) 溝10の幅が狭くなった地点の西側で検出した、南北に並ぶ2個の柱穴とその東西に2箇所ずつ対応して確認した小掘立柱である。位置的に門跡と考えられ、少なくとも2時期の建替えが確認できる。古段階は掘立柱構造の棟門(図版8-3)で、掘形は北柱穴で南北約1.35m、東西約0.7m、深さ0.7mを計り、南柱穴で南北約1.15m、東西約0.7m、深さ0.6mとなっている。柱径は推定で約0.3mと考えられ、ともに北側に倒して抜き取られている。柱間は約3.6m(12尺)である。新段階は古段階の柱抜取穴を丁寧に版築状に埋め立て、上層の凹みを砂礫層で固めている(図版9-2)。版築状埋め立ての上面には北柱穴では長軸約17cmの白色の自然礫(チャート)が、南柱穴では長軸約14cmの赤い自然礫(チャート)が同位置に1個ずつ据えられており、建て替えに伴う地鎮に関係するものであろう。構造的には砂礫層の上に礎石を据えたと考えられ、掘立柱構造の棟門から礎石建て構造に建て替えられたと考えられる。また、東西の小掘立柱は古段階の柱筋には乗らないことから、新段階に設けられたと推定でき、新段階の構造は本柱が礎石建てで東西に四個の袖柱をもつ四脚門として復元できる<sup>2)</sup>(図版8-2)。新段階の柱間は袖柱の南北柱間から4.2m(14尺)、本柱から袖柱の出は東(外側)は約1.5m(5尺)、西(内側)は約1.65m(5.5尺)である。内溝の存在から本柱の南北心( $Y=-28,460.25$ )に築地を取り付いたと想定できる。なお、門の中心は $X=-117,328.8$ で、一条大路南側溝から南へ44.8m、溝13心から北へ14.4mとなっており、推定一条大路南築地心から南へ150尺、宅地区画溝心北に50尺と計画的に割り付けられている。

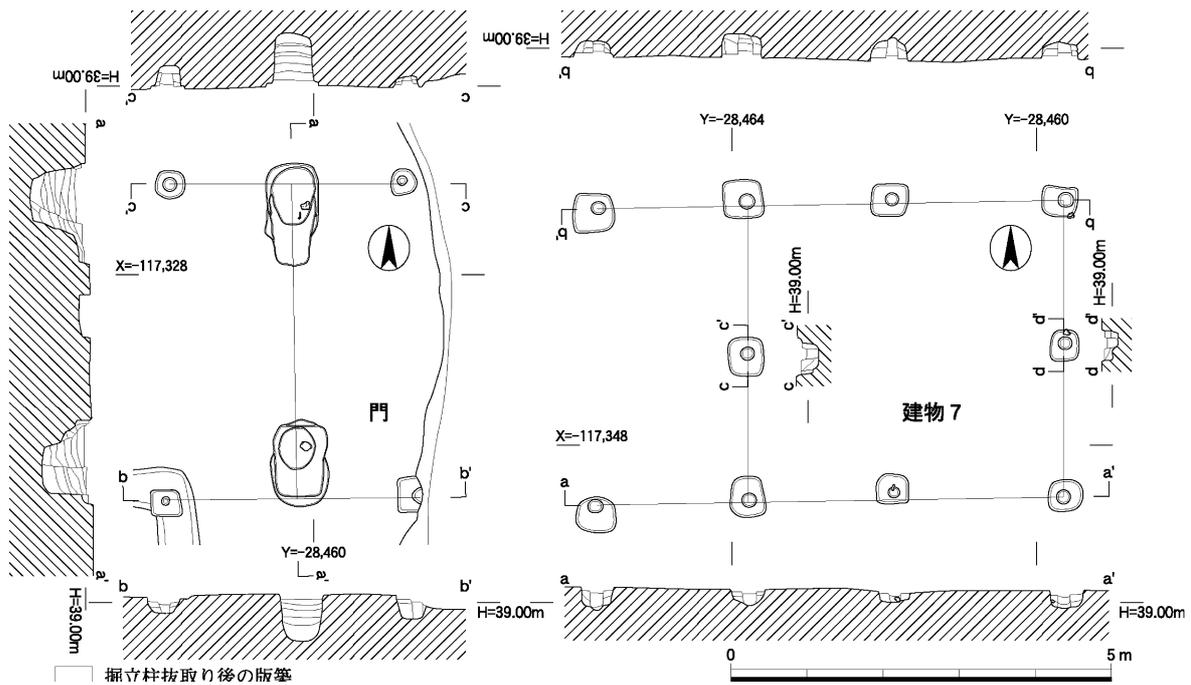


図8 門・建物7実測図(1:100)

溝5～9(方形区画溝群) 門跡の南西部、西三坊大路西側溝と宅地区画溝の角地で、溝5・8・9によって南北約10.5mの方形に区画された遺構を検出している。中を2本の東西溝6・7で、さらに3つの小区画に分割している。溝5・6・7・9は幅0.4～0.5m、深さ0.15mと小規模だが、南限の溝8は幅約0.8mとやや大きい。溝8は下層の築地内溝(溝12)と合流する溝で宅地造営当初までさかのぼるが、外の溝は宅地の最終段階あるいは廃絶後に旧区画に規制されて穿たれた溝である。なお、溝8と宅地区画溝13の距離は約0.9mと狭く、この間に閉鎖施設の存在は確認できない。また、溝9の埋土が四脚門南西柱穴を覆っており、方形区画溝群が門より後につくられたものであることを示している。

溝12(南内溝)(図版4) 方形区画溝群の下層で検出した南北方向の溝である。深さ約0.15mと浅く、北端はX=-117,330.7ラインで直線的に途切れている。南へはX=-117,337ラインまでは幅3.1～3.3mで、幅約1.1mと急激に狭まって溝8に合流し、南東隅で西三坊大路西側溝に排水している。北端部は溝5と、東肩は溝9と合致しており、上層の方形区画がこの内溝に規制されていることは明らかである。溝12東肩と西三坊大路西側溝の西肩の距離は約2.5mで北側の内溝と共通しており、門跡から南に築地が延びていたことを示唆している。また、北端ラインは門跡の南柱筋と一致しており、築地北内溝11の南端ラインとの間が、門から宅地内に入る東西通路として機能していたと考えられる。

柵4(図版4・10-3) 溝13の下層で検出した東西の掘立柱塀である。3間分(約8.2m)を検出しており、東端は溝10西肩部で止まり、西は調査区外に延びる。柱間は2.7m(9尺)等間を意識しているようである。柱穴は掘形が一辺0.4～0.5mの隅丸方形で底部柱当りに多量の根石を敷いており、柱の根巻きにも礫を用いている。X=-117,343ラインにあり、最も古い段階に設け

られた一町を南北に2分割する掘立柱塀と想定できるが、東端が西側溝西肩部まで延びており、北側に想定できる西三坊大路西築地よりも路面側に塀が突き出ている。溝13の下層で検出していることから、門や築地によって宅地が整備された段階では機能を失っていた可能性が高い。

建物7（図版10-1・2） 宅地区画溝13の南で検出した東西棟の建物である。南北2間（約3.9m）、東西3間（約6.2m）以上で、東から2間目に間仕切りの柱をもっており、西は調査区外に延びている。柱間は梁行が1.95m（6.5尺）等間、桁行は東端1間が2.25m（7.5尺）で西2間は1.95m（6.5尺）に復元できる。柱掘形は一边0.4～0.5mの隅丸方形で、柱径は0.15～0.2mである。東側柱列が門跡から延びる築地東辺と合致すると考えられ、築地がここまで延びず宅地区画溝で止まっていたことを示唆している。あるいは、柵7とともに門・築地で整備されるよりも一段階古い遺構である可能性もある。

### （3）中世の遺構

溝14 調査区中央で検出した東西溝である。幅0.3～0.5m、深さは約0.1mと浅い。西半は東に対して北に約6°、東半は東に対して北に約14°振っており、この振れの変化は南の低位段丘の裾のラインに沿っている。埋土から13世紀後半の瓦器が出土した。

溝15 調査区西部で溝14に直交し、北に延びる溝である。溝14との合流地点は幅約1mと広いが、北方へ延びるほど細くなり、X=-117,326ライン付近で削平のため途絶えている。北に対して西へ約12°振っている。

#### 註

1) なお、以下での古墳時代の須恵器型式は田辺昭三氏による型式編年によって記述を行う。

田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981年

2) 今回検出した門遺構の上部構造については、古段階の棟門を建て替えていることから、新段階も棟門に袖柱を付け加えた構造に復元することもできる。ただ、棟門の場合、構造上本柱から軒桁までの距離を短くする必要があり、必然的に本柱と袖柱の距離は軒が深い四脚門より狭くなる。現存する棟門と四脚門の建築遺構を比較すると、同じ袖柱構造でも桁行に対する梁行の比率が棟門では0.7を越えないのに対し、四脚門ではすべて0.7以上となる。今回検出した門遺構の比率をみると0.75であり、比率的に四脚門である可能性が高いといえる。

表2 棟門と四脚門遺構の規模比較表（川上 貢氏作成）

門構造	建築遺構所在地	時代	桁行	梁行	梁行/桁行
棟門	京都 教王護国寺灌頂院北門	鎌倉時代前期	4.09m	2.43m	0.594
棟門	奈良 新薬師寺東門	鎌倉時代前期	4.502m	2.62m	0.582
棟門	京都 大徳寺瑞峰院表門	室町時代後期	3.12m	2.00m	0.641
四脚門	京都 教王護国寺灌頂院東門	鎌倉時代前期	4.42m	3.18m	0.719
四脚門	奈良 新薬師寺南門	鎌倉時代後期	4.845m	3.53m	0.728
四脚門	奈良 法隆寺東門	鎌倉時代後期	4.08m	3.22m	0.789
四脚門	奈良 宗源寺	鎌倉時代後期	3.54m	2.79m	0.788

## 4 . 遺 物

出土遺物には、土器・石器・土製品・瓦がある。遺物の年代幅は縄文時代から鎌倉時代まであるが、なかでも古墳時代と長岡京期の土器がその大半を占める。ここでは古墳時代以前と長岡京期に大別し、主要な遺物について概述する。

### (1)古墳時代以前の遺物

古墳時代の遺物として、土師器・須恵器・土製品が出土した。土師器は破片数としては多いが、器形のわかるものは高杯だけで、他の多くは甕である。須恵器は 期TK-43型式から 期TK-209型式が中心で、溝1・2・4、建物2柱穴から良好な資料が出土している。また、遺物包含層や長岡京期の溝10などから、当該期の遺物の他に 期TK-23型式から 期TK-47型式に属する古型式の遺物も少量出土しており、細片であるが叩き目がある薄手の製塩土器も少量出土している。その他、明確な遺構に伴うものではないが、遺構検出中に石鏃と石匙が各1点出土した。磨製石斧は盛土から発見した。ここではまず、縄文時代から弥生時代の遺物と考えられる石器類について述べて、その後古墳時代の遺物について出土遺構ごとに報告する。

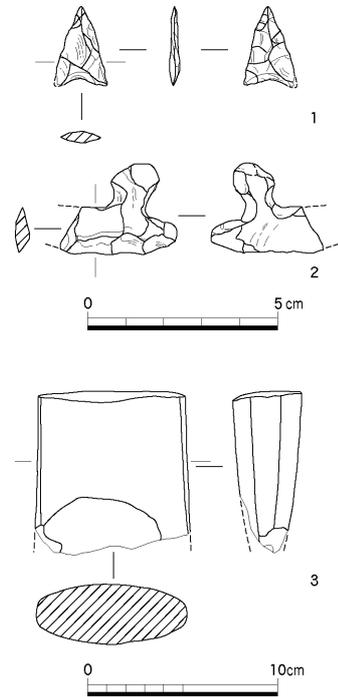


図9 石製品実測図  
(1:2 1:4)

縄文時代から弥生時代の石器(図9-1~3、図版11)

石鏃(1) 長さ2.1cmで、基部の幅は1.4cmある。完形で、サヌカイト製である。重さは0.68gを測る。

石匙(2) 刃部の先端を欠損しているが残存長3.0cmで、長さ1.2cm、幅1.2cmの基部をもつ。サヌカイト製である。重さは2.81gを測る。

磨製石斧(3) 先端と基部を欠き、現存長は9cm、幅は8cm

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代～ 弥生時代	石鏃、石匙、磨製石斧	1箱	石鏃1点、石匙1点、 磨製石斧1点	0箱	0箱
古墳時代後期	土師器、須恵器	7箱	須恵器14点、土師器1点	4箱	1箱
長岡京期	土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、瓦、製塩土器、土馬	12箱	土師器10点、須恵器13点、 緑釉陶器1点、土馬2点	7箱	2箱
平安時代～ 鎌倉時代	土師器、瓦器	1箱		0箱	1箱
合計		20箱	44点(5箱)	11箱	4箱

である。蛤刃の石斧で、丁寧に磨かれている。重さは406gを測る。

溝2出土土器（図版11、図10-4～8）

須恵器蓋（4） 口縁部がわずかに開きながら端部に至るもので、端部は丸くおさめる。天井部と口縁部の境界は屈曲部に強い回転ナデを施し、鈍い稜を作り出すことによって表現する。天井部のヘラ削りは約2/3ほど逆時計回りに施すが、全体に粗い仕上げとなっている。口径は13.8cmである。

須恵器杯身（5・6） 受け部から短く内傾した口縁部が伸びるもので、底部は丸い。口縁端部は丸くおさめる。底部のヘラ削りは逆時計回りに施され、全体の3/4近くにおよぶが、調整は粗く杯身5では中心部にまでヘラ削りが及ばない。杯身5は口径12.7cm、器高4.5cmであり、杯身6が口径12.9cm、器高4.0cmである。

須恵器高杯（7） 長脚高杯の杯部である。口縁部は短く外反しながら内傾して立ち上がり、端部を丸くおさめる。杯部底部のヘラ削りは逆時計回りに全体の約3/4ほど施され、脚部を取り付けたあとにナデ調整で仕上げる。口径は12.7cmである。

土師器高杯（8） 脚裾部の径が13cmの破片である。円錐形の脚柱部から屈曲して裾部がラッパ状に開き、端部はやや下方に肥厚させながら丸くおさめる。内面には絞り目痕跡が明瞭に残る。表面の摩耗が激しいが、脚柱部外面はナデ調整によって仕上げられている。

溝4出土土器（図10-9～11）

須恵器杯身（9） 底部から直線的に体部が伸びて、受け部に至るもので、口縁部はわずかに外

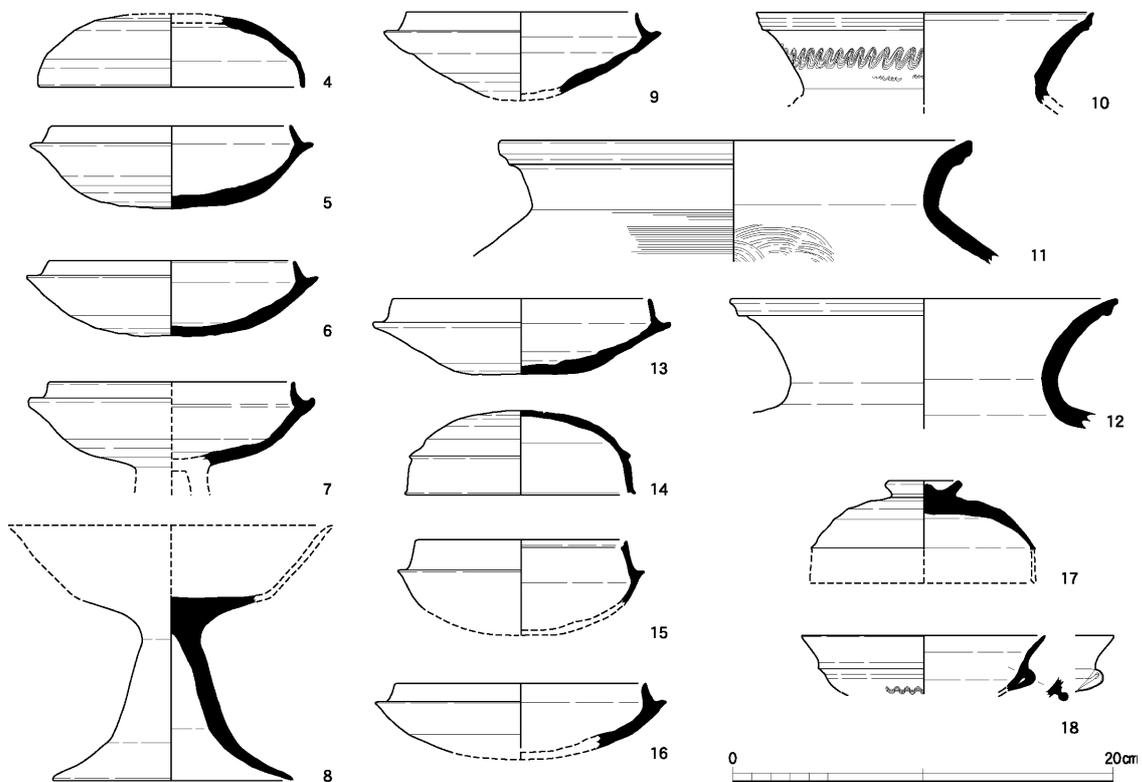


図10 古墳時代土器実測図（1：4）

反しながら内傾して立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。底部のヘラ削りは逆時計回りで粗く、全体の1/2強に狭まっている。復元口径は12.1cmである。

須恵器壺(10) 口縁部は外反して立ち上がり、端部を上方に強く摘み上げるとともに下方にも若干肥厚させる。口縁部外面にクシ描きの波状文がある。復元口径は17.8cmである。

須恵器甕(11) 口縁部は短く外反して立ち上がり、端部外面のやや下がった位置を外側に肥厚させる。体部は細かい並行叩き調整で肩部はカキ目調整で仕上げる。体部内面には同心円文あて具痕跡が明瞭に残る。復元口径は25cm前後である。

溝1出土土器(図10-12)

須恵器甕(12) 口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部は外側に肥厚させる。復元口径は20.5cm前後である。

建物2出土土器(図版11、図10-13)

須恵器杯身(13) 平らな底部から直線的に緩やかに立ち上がり、受け部に至る。口縁部は内傾して立ち上がり、端部を丸くおさめる。底部のヘラ削りは逆時計回りで粗く、1/2強に狭まっている。また、中心部にまでヘラ削りが及ばず、回転ヘラ切りの痕跡を残す。口径は13.5cmである。これは、掘立柱建物群の帰属年代を示す、良好な資料である。

包含層他出土土器(図10-14~18)

須恵器杯蓋(14) 天井部が丸く、口縁部と天井部の境界は稜線を短く摘みだして成形する。口縁部はわずかに開き、端部は外方に若干摘み出して片ホゾ状に内傾させる。天井部のヘラ削りは、時計回りに4/5強の範囲に施している。口径は12.0cmである。包含層出土。

須恵器杯身(15) 受け部から口縁部が内傾して立ち上がり、端部は外側に摘み出して片ホゾ状に内傾させる。復元口径は11.0cmである。溝10出土。

須恵器杯身(16) 底部から斜め上方に受け部へと立ち上がり、わずかに内傾する短い口縁部が付く。口縁端部は丸くおさめる。底部は全体の約3/4を逆時計回りにヘラ削り調整する。復元口径は13.2cmである。溝10出土。

須恵器有蓋高杯蓋(17) 短脚高杯の蓋で、天井部に大きめの中心が凹むつまみが付く。口縁部は欠損するが、天井部との境界は短く突出した稜線で表す。天井部のヘラ削りは全体の約4/5に施し、方向は逆時計回りである。包含層出土。

須恵器無蓋高杯(18) 無蓋高杯の杯部で、体部下半には波状紋があり、上部には細い円柱状の把手が付く。門柱穴出土。

## (2) 長岡京期の遺物

土器類は土師器・黒色土器・須恵器が出土し、大半が土師器と須恵器である。土師器の器形は、皿・椀・杯・ミニチュア鉢などが、須恵器では蓋・杯・壺・甕などがある。また、溝10と溝13の合流地点で、溝13から路面に氾濫した整地層から土馬が2点出土した。なお、瓦類は溝10・11などで、平瓦4点と丸瓦5点が出土したにすぎず非常に少ない。

溝10・11出土土器（図11-19～37）

土師器碗（19～21） 口径9.7cmの小型の碗（19）と、口径12cm前後の中型の碗（20・21）が出土しているが、大型のものはない。20は口径11.6cm、21は口径12.8cmである。外面をヘラ削りするが、21の端部は削り残して横ナデが見える。19外面には螺旋状の粘土継ぎ目が認められる。

土師器皿（22～25） 口径が10cm未満で器高が1.8cmほどの小皿（22・23）と、15cmを越える中皿（24）・大皿（25）がある。22は口径9.6cm、23は口径9.9cmで、口縁部をナデ仕上げし、そのため端部は外反する。24は口径16cm、25は口径20.2cmで、底部から口縁部下半をヘラ削りする。

土師器杯（26） 口径18.8cm、器高は4.6cmで、外面はヘラ削りする。端部は内側に少し巻き込む。

土師器甕（27） 体部から口縁部が「く」字状に外反するもので、端部はつまみ上げている。外面は刷毛目調整し、内面はナデで仕上げる。内外面にススが付着している。

須恵器杯蓋（28～31） 口径が15cm未満の中型のもの（29・30）と、口径16.5cmの大型のもの（31）、そして口径27.8cmの特大型のもの（28）がある。器高のわかる蓋29は口径13.9cm、器高2.0cmで、天井部中心からややずれた位置に扁平なつまみを貼り付ける。30は口径14.6cmで、天井部

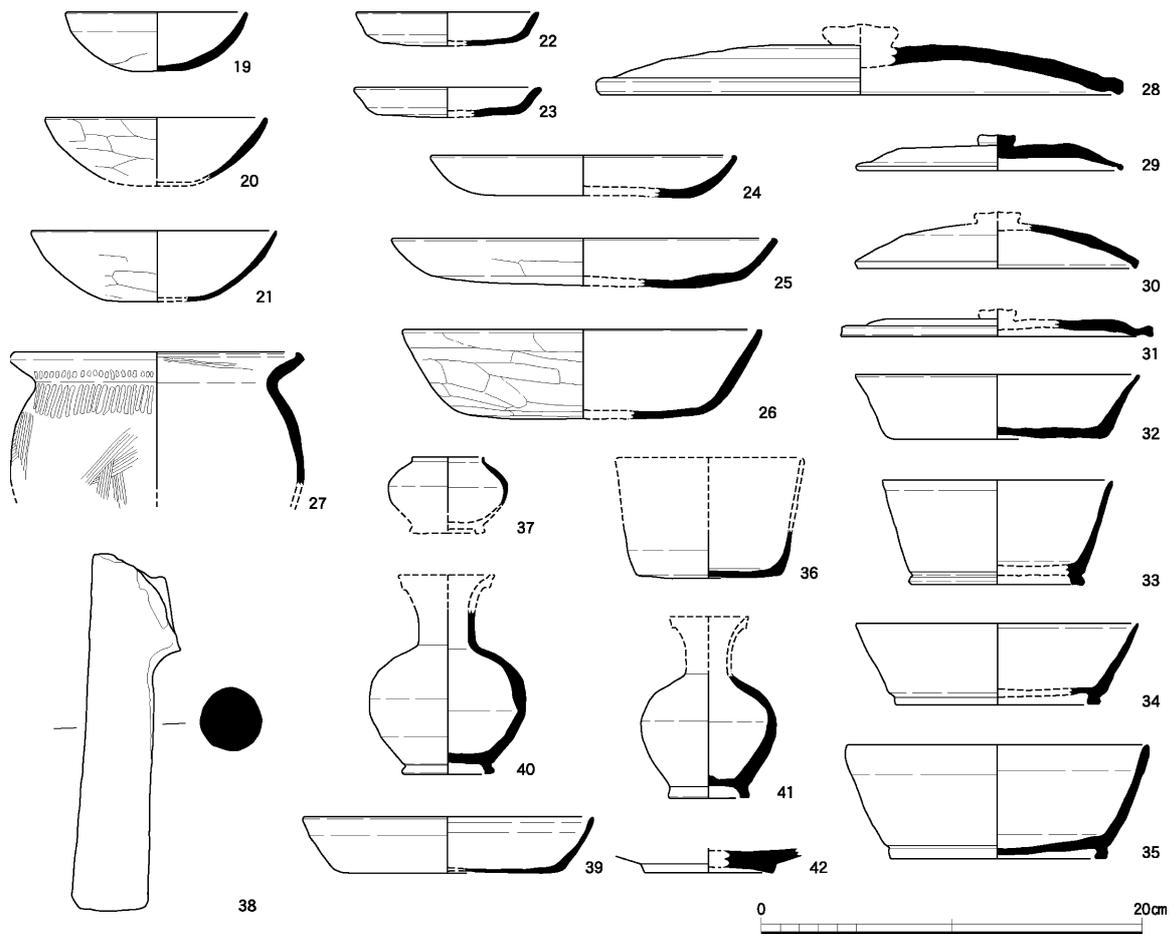


図11 長岡京期土器実測図（1：4）

がやや丸みを帯びる。

須恵器杯（32～35） 32は無高台のもので、口径15.0cm、器高3.4cmである。33～35は角形の低い高台が体部と底部の境に付く。33は口径12.1cm、器高5.6cmとやや深い。34は口径14.8cm、器高4.3cmである。35は口径15.8cm、器高6.0cmである。

須恵器椀（36） 底部のみの破片であるが、体部が直線的に上方に立ち上がる深い椀と考えられる。底部外面はやや丸みを帯び、回転ヘラ切り痕跡を丁寧にナデ消している。内面には多くの灰がかぶっている。

須恵器壺（37） 肩部から口縁部が短く立ち上がる、口径3.8cmの小壺である。

溝13出土土器（図版11、図11-38～40）

土師器足釜（38） 脚部だけの出土で形は不明であるが、類例から羽釜になると思われる。円柱状の足の太さは3.5cmで、長さが13cmある。長石・チャートなど、砂粒を多く含む胎土である。

須恵器杯（39） 口径15.2cm、器高3.0cmの杯で、高台は付かない。

須恵器壺（40） 小型の壺で、丸い体部に輪高台が付く。口縁部は欠損している。

溝13路面氾濫部出土土器および土馬（図11-41、図版11-43・44）

須恵器壺（41） 40と同形態の小壺で、体部はやや細長い。

土馬（43） 体部は長円が5cm、短円が4cm前後の楕円形で、下部には脚の、上部にはたてがみの痕跡が残る。長岡京期に一般的ないわゆる「都城型」土馬とは形態が異なっており、形式的に奈良時代にさかのぼる可能性がある。

土馬（44） 粘土板を折り曲げて成形する、いわゆる「都城型」土馬の体部片である。

門柱穴出土土器（図11-42）

緑釉陶器素地皿（42） 蛇ノ目高台の皿で、軟質に焼成されているが、釉は無い。素地は灰白色で、細かな砂粒を含む。四脚門南側の中央柱穴から出土した。

### （3）中世の遺物

鎌倉時代の瓦器・土師器など、少量の遺物が出土したが、図示できるものはなかった。

## 5.まとめ

### (1) 古墳時代の建物群について

下層で古墳時代の掘立柱建物群を6棟検出しているが、これらの建物は方位の共通性や建物配置などから、明らかに有機的に関係をもつ建物群といえる。建物群の初現年代は明らかでないが、北側の右京772次調査B1区の調査で5世紀末の竪穴住居群と南限溝を確認しており、溝4との関係からこれらの竪穴住居群が廃絶した後に建物群が造営されたと考えられる。

遺構からの出土遺物で推定すると、溝2からまとまった土器群が出土しており、陶邑編年で期TK-43型式の新相から期TK-209型式に比定できる。また、下限年代を知る資料として建物2の柱穴から、期TK-209型式新相の須恵器杯身が出土している。ただ、建物2に切られる溝4から出土する須恵器にはあまり型式差が認められない。つまり、これらの建物群は竪穴住居群が廃絶した後に1世紀近い断絶期間を経て造営され、短期間のうちに6世紀末から7世紀初頭には廃絶したことになる。

6世紀から7世紀前半にかけては、畿内の集落建物が竪穴構造から掘立柱構造に移行する時期にあたり、各遺跡についての変遷過程が様々な視点から検討されてきた<sup>1)</sup>。とくに、大阪府大園遺跡では他の地域よりも掘立柱集落の成立が早く、5世紀後半に約37㎡の床面積を持つ大型建物と10㎡をやや越えるほどの倉が規則的に配置され、溝によって方形に区画された建物群が出現する。そして、5世紀末には背後の低位段丘上に大園古墳が造営されており、6世紀には大園古墳を中心として段丘上全面的に掘立柱建物群が展開している<sup>2)</sup>。これらの遺構の評価として、大型建物を中心に複数の建物と倉をもち、区画施設で空間を占有する建物群を「首長層の居住空間」と認識していることは重要である。

最近の調査では広大な濠によって居住空間を外部から隔離する、大型の首長居館の実態が各地で明らかになりつつあり、防御制の低い大園遺跡のような中・小型居館の評価にも慎重な態度が必要である<sup>3)</sup>。しかし、掘立柱建物集落は竪穴住居で構成される一般集落とは明らかに階層的優位に立つものであり、実際に山城地域では7世紀前半まで一般集落は竪穴住居で構成される。また、古墳時代には一般集落層よりも首長間に階層的上下関係が進行したと考えられており<sup>4)</sup>、その階層関係が首長居館の規模や形態にも反映されることは充分想定できる<sup>5)</sup>。時期は若干下がるが今回検出した建物群も、当地域では一般集落には認められない掘立柱建物構造であり、隔離された空間に規則正しく建物を配置している点を積極的に評価して、大原野地域を基盤とする首長層の居住空間として認識できるのである。

そこで今回の建物群を詳細に分析すると、まず中心建物となるのが約30㎡の床面積をもつ建物1で、少なくとも1回は同位置同規模で建て替えが行われている。建物1の東側には建物などの遺構は全く認められず、広場として常に空間が確保されている。そして、建物1の南北に建物2から建物6が配置されるが、遺構の切りあい関係から2時期の変遷が想定できる。古段階は建物

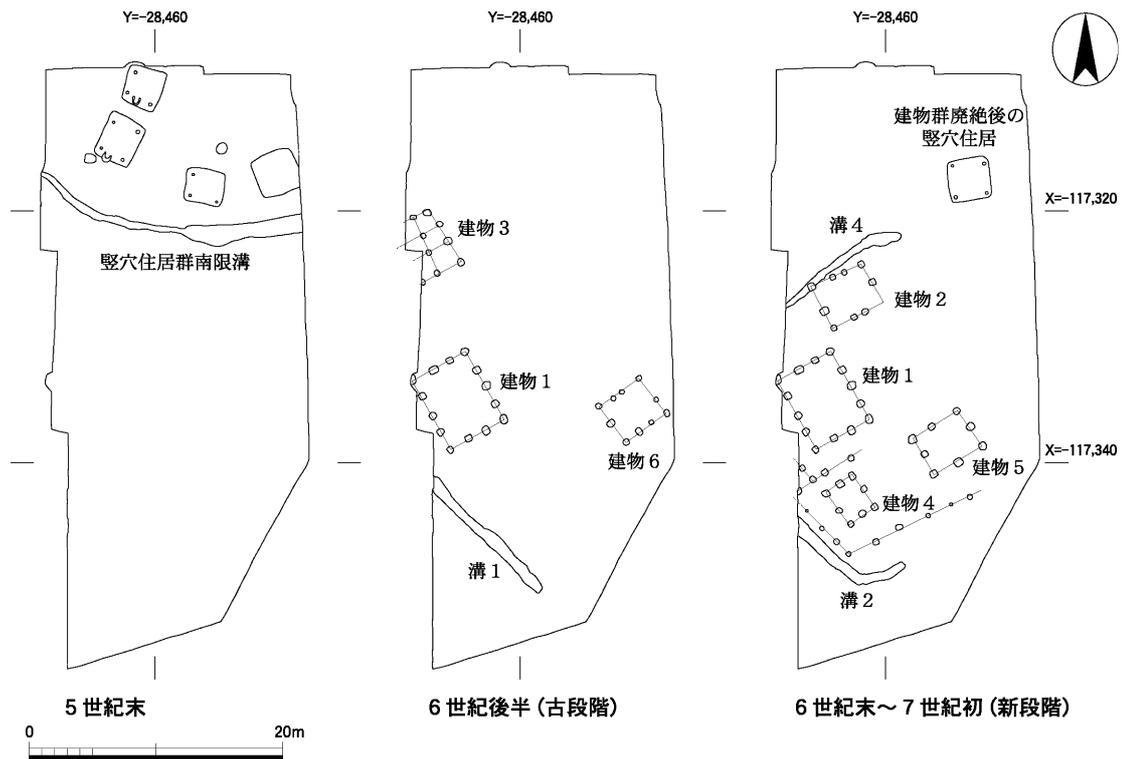


図12 古墳時代遺構変遷図（1：600）

1の南東に床面積14㎡の東西建物6が、北側に倉庫と考えられる建物3が建てられ、溝1によって西側が区画される段階である。新段階は建物1の南に倉庫と考えられる建物4と建物5が並んで建てられ、溝2と区画内に柵1・2で南を区画する時期である。当初は北側を溝4で区画していたが、後にこの溝を埋めて東西建物2を建て直している。建物配置がより規則的になるだけでなく、居住空間の中心域が柵で区画され、余剰生産物を保管する倉庫群が区画内にとりこまれることが遺構の変遷からわかる。区画が明確でなく建物と倉庫が散在的に配置される空間利用から、柵などで方形に区画された特別な空間に建物と倉庫群を規則的に配置する様相から、居住空間としての発展形態を読み取ることができよう。

また、地理的・歴史的環境からも、この場所が立地的に首長の居住空間として最適であったことを示唆している。前述したように南側低位段丘上には、時期が6世紀前半にさかのぼるが井ノ内稲荷塚古墳や井ノ内車塚古墳などの首長墓が造営されており、建物1は首長墓群が営まれた低位段丘を背景に北東方向を正面に造営されたと考えられる。掘立柱建物群の年代は前述したように6世紀末から7世紀初頭を中心とするが、井ノ内稲荷塚古墳では発掘調査によって後円部の横穴式石室に6世紀末まで追葬が行われていたことが明らかになっており、古墳群と近接した立地条件からその被葬者の有力候補として、上里遺跡を在地基盤に含む首長層を想定することもあながち無理はないであろう。さらに、正面北東方向には元稲荷古墳や五塚原古墳などの前期古墳が連綿と造営された長岡丘陵がそびえ、丘陵の西裾には小畑川が流れている。この小畑川に沿って乙訓から丹波へ抜ける古道が通っており、この道は後には山陰道に継承される。上里遺跡の掘立柱建物群はこれらの幹線路を正面にしており、北西方向には老ノ坂や愛宕山が景観として望むこ

とができる。これらの立地条件から、まさに上里遺跡は水陸の重要幹線路を押さえる絶好の位置にあるといえる。<sup>7)</sup>

以上のように今回検出した建物群は、空間的広がりには明らかでないが竪穴住居群で構成される乙訓の一般集落とは異なっており、6世紀に大原野地域を勢力下に治めた首長居館の一角である可能性は非常に高いといえる。右京772次調査では5世紀後半の竪穴住居群とともに、6世紀末から7世紀初頭の竪穴住居が検出されており、低位段丘上の井ノ口遺跡でも古墳群が途絶える同じ時期に竪穴住居群が古墳の周囲につくられるようになる。これらの事実は、掘立柱建物群の廃絶とともにこの地域が一般集落に戻っていったことを示しており、逆に6世紀段階の遺跡の特殊性を暗示していることになる。

乙訓地域では低位段丘の南側に所在する今里遺跡においても、6世紀後半から7世紀初頭に比定できる大型掘立柱建物群が確認されており首長居館と想定されているが、<sup>8)</sup>6世紀から7世紀にかけての首長居館の動向はほとんど明らかにされていない。古墳時代後期から律令国家成立期における地方首長の実態を考古学的に明らかにするためにも、今回の調査成果は非常に大きなものであったといえる。

## (2) 長岡京期の条坊遺構と変遷について

長岡京期の大きな成果は、まず西三坊大路の位置が判明したことである。側溝心の座標値はY=-28,258.0~-28,258.2で北に対してやや西に振れており、長岡京復元モデルが全体に北に対して数分東に振る状況とは異なっている。<sup>9)</sup>右京772次調査で検出した一条大路南側溝も、検出した東西端の座標値をみると東へ7ほど振っているが、一町域と八町域の側溝は逆にそれぞれ西に6~8振っており、推定西四坊坊間東小路の位置で一条大路南側溝が南北に0.8mほどずれていることが判明している。左京域のデータと比較しても、一条大路南側溝は西に振れる傾向があり、二条条間大路以北では宮城面大路以外の大路はすべて西に振るといふ最近の分析結果を裏付けるかたちとなっている。<sup>10)</sup>

また、宅地区画溝13および柵4は一条大路南側溝から心々で約60mとなっており、明らかに200尺を意識した宅地分割である。一条大路と二条条間北小路に挟まれた宅地の南北幅は、山中章氏の復元モデルによると350尺と推定されている。<sup>11)</sup>南側の低位段丘に条坊が施行されたかどうかは今後の課題であるが、段丘北裾部の一町域では半町として南北200尺の宅地分割がなされたと考えられる。

次に、西三坊大路に開く門を発見したことも大きな成果である。門は初めは掘立柱構造の棟門だったが、後に掘立支柱をもつ礎石建ての四脚門に建て替えており、柱穴出土土器から建て替えが長岡京期末から平安時代初頭であることが判明した。『延喜式』によると、平安京では門を大路に面して建てられるのは三位以上の高級貴族だけである。また、平安時代に四脚門を邸宅の正門として許されたのも、原則として三位以上とされている。今回検出した門遺構は西三坊大路に開く格式の高い門といえるが、長岡京では大路に面した棟門を各所で確認しており、<sup>12)</sup>『延喜式』の規

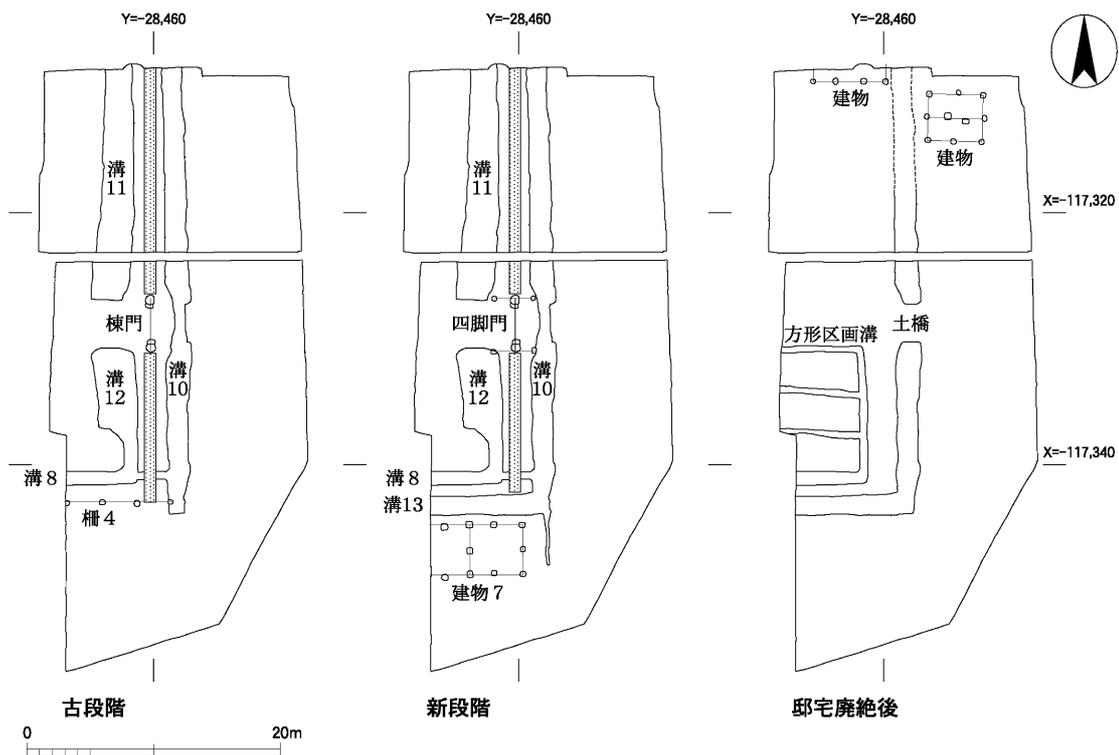


図13 長岡京期遺構変遷図（1：600）

定がそのまま長岡京期まで遡る可能性は低いであろう。ただ、柱間が造営当初の棟門で3.6m（12尺）、四脚門で4.2m（14尺）と、他で検出されている門遺構よりも大きく、長岡京期だけでなく平安遷都後まである程度の身分を持つ人々がここに暮らしていたことは間違いない。

ここで、長岡京期の遺構の変遷についてまとめておきたい。長岡京条坊の施行に伴い右京二条四坊一町の低位段丘北側にも宅地班給が及び、西三坊大路に面して棟門および築地が築かれた。宅地の南北幅は一条大路南築地（南側溝）から半町（200尺）で南限塀である柵4が設けられ、西三坊大路西築地はこの柵4に取り付き、西側溝もここまでしか掘削されなかったようである。西築地および南限塀には内溝が設けられ、宅地内の雨水などを宅地南東部に集めて西側溝へ排水するようになっていた。

新段階になると、棟門は四脚門に建て替えられるとともに南限塀（柵4）は取り除かれ、低位段丘からの雨水を集める東西溝13が掘削される。それとともに、南限を閉鎖するように東西建物7が建てられ、西三坊大路西側溝も建物7の東妻を区画するように細長く南へ延長される。ただ、低位段丘上を西三坊大路が縦断して延びていたかどうかは、段丘上で明確な条坊遺構が検出されていないため現状では不明である。一町域での宅地利用も低位段丘下の北側半町のみであったと考えざるをえない。なお、新段階の建て替えは四脚門柱穴から出土した土器から、長岡京期でも末期あるいは平安時代初頭と考えられ、この宅地が平安遷都後も機能していたことを示唆している。

その後、明確な年代は比定できないが平安時代中ごろには邸宅が廃絶し、条坊遺構に規制されるように方形区画溝群がつくられる。これら小溝群によって構成される遺構について、秋山浩三

氏は左京三条三坊四町で確認した同様の遺構を検討し、長岡京域の他の検出例も集成して菜園地としての性格を想定している<sup>13)</sup>。また、築地は崩れて土塁状に残り、西側溝も部分的に残存するような状況だったのであろう。方形区画溝が四脚門の南西柱穴を切っており、門もすでになかったことが窺える。ただ、門があった場所は東西通路としての機能が失われず、門跡の前の側溝内では礫を意図的に入れて土橋状に埋め立てていた。なお、このころ北側の右京772次調査で検出した掘立柱建物などの建物群が造営され、長岡京条坊地割が徐々に失われていったと考えられる。そして、13世紀に入りこの地域にも条里地割が施行されるに及んで、長岡京条坊の痕跡は完全に姿を消したのである。

### (3) 出土土器群について

今回の調査地点に隣接する右京772次調査では、5世紀後半を中心とする竪穴住居跡が15棟検出されていて、集落を囲む南限溝と推定できる溝も確認された。この溝と接した今回の調査地点でも包含層などから同時期の須恵器が出土したが、量的には少なく集落の縁辺部の状況を示している。古墳時代の中心的な遺構は6棟の掘立柱建物であるが、その帰属時期が問題となる。各柱穴から丁寧に遺物を集めたが、年代のわかる良好な土器は、建物2の北西部の柱穴から出土した須恵器杯身だけである。

ここで、建物群の帰属時期を在地でより深く理解するために、石室出土の一括資料が分析されている物集女車塚古墳<sup>14)</sup>と大枝山古墳群<sup>15)</sup>の須恵器と、今回出土した溝2および建物2柱穴の須恵器を比較検討してみたい。建物群の西を区画する溝2から出土した須恵器杯は、蓋で口径13.8cm、杯身で口径13cm弱で、ヘラ削りは天井部(底部)の3/4から2/3に及ぶが、調整が粗く中心部を削り残している。これらの土器群は、物集女車塚古墳では最初の追葬に伴う「石室土器2群」と型的に類似しており、大枝山古墳群では類b手法として分類されている一群である。また、建物2柱穴から出土した須恵器杯身は口径13.5cmとやや大型であるが、器形が逆台形を呈し底部ヘラ削りが全体の1/2しか及ばない点を考慮すると、大枝山古墳群の類b手法から類b手法に近い型式となる。これらの土器群は在地性がかなり強いが、溝2の須恵器が期TK-43型式から期TK-209型式、建物2柱穴の須恵器が期TK-209型式に属すると判断できる。絶対年代としては、6世紀末から7世紀初頭の年代観を与えることができよう

長岡京期の土器については、今回の調査で出土した土器破片数を数えることによって、土器組成を調べた。西三坊大路西側溝(溝10)からは、1,376点の土器が出土した。内訳は土師器が1,091点、須恵器は285点で、比率では土師器79.3%と須恵器20.7%になる。同様に築地内溝(溝11)では、土師器が783点、須恵器は154点で、比率では土師器79.1%と須恵器20.9%になり、ほぼ同一になる。これは近接した遺構であり、周辺で使用された土器の一般的な組成であったことを示している。

以前、長岡京の西京極に近接した地点(右京第746次調査)から出土した遺物の破片数をカウントして検討した<sup>16)</sup>。とくに、右京一条四坊十四町で検出したSK563・SD543などと比較すると、こ

ここでは土師器が95%、須恵器が5%となり、大きな違いがある。その差がどこから生まれたのかを考えると、これは主として遺跡の性格に起因していると推定される。一条四坊十四町では、祭祀に使われた土器が一括投棄された状態で出土したため、土師器が多く出土する傾向が窺える。それに対し、当調査区では道路や築地の側溝から、細かな破片となって出土しており、宅地内で普段使用されていた土器が細片化し、埋没したと考えられる。つまり、祭祀などの意図的な一括廃棄とは異なり、より一般的な土器組成がデータとして表れたと考えられるのである。

以上、古墳時代と長岡京期の遺構と遺物について、現状で想定できる調査所見をまとめてみた。しかし、空間的広がりをもつこれらの遺跡に対して、調査面積はあまりに狭く不明な点も少なくない。とくに、古墳時代の建物群も長岡京期の邸宅も、主要な遺構が調査地西側に展開することは充分予測できる。今後の発掘調査によって、丘陵北側に所在した古墳時代の首長居館あるいは長岡京期の邸宅の全容が明らかになると考えられる。また、昨年度から引き続いて実施してきた発掘調査によって、長岡京北西域の大原野地域にも条坊が施行されていたことが明らかになってきた。今後は独自の様相をみせる大原野域での長岡京条坊計画の実態を発掘調査によって解明していく必要がある。

#### 註

- 1) 広瀬和雄「古墳時代の集落類型 - 西日本を中心として - 」『考古学研究』25-1 1978年  
小笠原好彦「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」『考古学研究』25-4 1979年  
山田 猛「七世紀初頭における集落構成の変質」『考古学研究』28-3 1981年
- 2) 広瀬和雄「大園遺跡における集落の展開」『大園遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1982年
- 3) 都出比呂志「古墳時代首長の政治拠点」『論苑考古学』天山社 1993年  
同「古墳時代の豪族の居館」『岩波講座日本通史』第2巻 岩波書店 1993年
- 4) 広瀬和雄「古墳時代の社会構造 - 国家成立期の首長と農民 - 」『歴史評論』514号 1993年
- 5) 寺沢 薫「古墳時代の首長居館 - 階級と権力行使の場としての居館 - 」『古代学研究』141号 1998年
- 6) 『長岡京市における後期古墳の調査』長岡京市文化財調査報告書第44冊 長岡京市教育委員会 2002年
- 7) 橋本博文「古墳時代首長層居宅の構造とその性格」『古代探叢』早稲田大学出版部 1985年  
同「古墳時代における首長層居宅(総論)」『考古学ジャーナル』289号 1988年
- 8) 『長岡京市史』資料編1 長岡京市役所 1991年
- 9) 内田賢二「長岡京条坊復元のための平均計算」『長岡京』31号 長岡京跡発掘調査研究所 1984年  
辻 純一「長岡京条坊復原における一考察」『研究紀要』第1号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 10) 上田育子「長岡京北辺域の条坊」『長岡京左京東院跡の調査研究 正殿地区』古代学研究所研究報告 第7輯 (財)古代学協会 2002年
- 11) 山中 章「古代条坊制論」『考古学研究』38-4 1992年

- 12) 左京二条三坊・四坊の調査でも二条条間大路に開く棟門を2箇所、東三坊大路に開く門跡および橋脚を3箇所を確認しているが、どの遺構も塀の一部を棟門とする非常に小規模なものである。  
『長岡京跡左京二条三・四坊・東土川遺跡』京都府遺跡調査報告書第28冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000年
- 13) 秋山浩三・清水みき「長岡京跡左京第221次(7ANFSK-2地区)～左京三条三坊四町(三条三坊二町)・東二坊大路、鶏冠井清水遺跡～八苦鬱調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第41集 (財) 向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 1997年  
同調査では東二坊大路に面して開く棟門と築地内溝も検出しており、当調査地での検出状況と非常に類似している。棟門は柱間約2.4mと狭く貴族邸宅の脇門として理解されており、造営当初は門をはいつたところに目隠し塀と掘立柱建物が建てられていた。しかし、後にこれらの塀や建物は撤去され、宅地内通路と通路にそって営まれた菜園地となったようである。これらの遺構群であるが、貴族邸宅から小規模宅地利用に変遷しており、年代も長岡京期内にすべて収まるかどうか検討する余地がある。年代的にそれほど下がらないとしても、貴族邸宅から菜園地利用に変化した契機として平安遷都を想定することも充分可能であろう。
- 14) 『物集女車塚』向日市埋蔵文化財調査報告書第23集 向日市教育委員会 1988年
- 15) 『大枝山古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第8冊 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 16) 『長岡京右京一条四坊十三・十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-2 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 2003年

# 圖 版

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょううきょうにじょうしぼういっちょうあと・かみさといせき							
書名	長岡京右京二条四坊一町跡・上里遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2003-4							
編集者名	網 伸也・百瀬正恒							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2003年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡 かみさといせき 上里遺跡	きょうとしにしきょうく 京都市西京区 おおはらのいわみちょう 大原野石見町 ちない 地内	26100	1047	34度 56分 31秒	135度 41分 18秒	2003年5月 22日～2003 年8月12日	約550m <sup>2</sup>	道路新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長岡京跡 上里遺跡	都城跡	縄文時代 ～弥生時代		石匙、石鏃、磨製石斧		西三坊大路路面・ 西側溝・内溝を検 出した。 西三坊大路に開く 門を検出した。		
	集落跡	古墳時代	建物、柵、溝	土師器、須恵器				
		長岡京期	西三坊大路路面・ 西側溝・内溝、 門、建物、溝	土師器、須恵器、緑釉 陶器、土馬				
		中世	溝	土師器、瓦器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-4  
長岡京右京二条四坊一町・上里遺跡

発行日 2003年9月30日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 075-256-0961